

与謝野晶子訳

源氏物語 松風卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

松風

紫式部

與謝野晶子訳

あぢきなき松の風かな泣けばなき小琴

をとればおなじ音を弾く<sup>ひ</sup>

（晶子）

東の院が美々しく落成したので、<sup>はなちるさと</sup>花散里といわれていた夫人を  
源氏は移らせた。<sup>わたどの</sup>西の対から渡殿へかけてをその居所に取って、

事務の扱い所、家司<sup>けいし</sup>の詰め所なども備わった、源氏の夫人の一人としての体面を損じないような住居<sup>すまい</sup>にしてあつた。東の対には明<sup>あか</sup>石<sup>し</sup>の人を置こうと源氏はかねてから思っていた。北の対をばことに広く立てて、かりにも源氏が愛人と見て、将来のことまでも約束してある人たちのすべてをそこへ集めて住ませようという考えをもっていた源氏は、そこを幾つにも仕切つて作らせた点で北の対は最もおもしろい建物になった。中央の寢殿<sup>しんでん</sup>はだれの住居<sup>すまい</sup>にも使わずに、時々源氏が来て休息をしたり、客を招いたりする座敷にしておいた。

明石へは始終手紙が送られた。このごろは上京を促すことばか

りを言う源氏であつた。女はまだ躊躇ちゆうちゆうをしているのである。わが身の上のかいなさをよく知っていて、自分などとは比べられぬ都の貴女たちきじよでさえ捨てられるのでもなく、また冷淡でなくもないような扱いを受けて、源氏のために物思いを多く作るといふ噂うわさを聞くのであるから、どれだけ愛されているという自信があつてその中へ出て行かれよう、姫君の生母の貧弱さを人目にさらすだけで、たまさかの訪問を待つにすぎない京の暮らしを考えるほど不安なことはないはんもんと煩悶はんもんをしながらも明石は、そうかといつて姫君をこの田舎いなかに置いて、世間から源氏の子として取り扱われないよ  
うな不幸な目にあわせることも非常に哀れなことであると思つ

て、出京は断然しないとも源氏へ答えることはできなかった。両親も娘の煩悶するのがもつともに思われて歎息ばかりしていた。

入道夫人の祖父の中務卿親王が昔持っておいでになった別荘が嵯峨の大井川のそばにあつて、宮家の相続者にしかとした人がないままに別荘などもそのままに荒廃させてあるのを思い出して、親王の時からずっと預かり人のようになっていた男を明石へ呼んで相談をした。

「私はもう京の生活を二度とすまいという決心で田舎へ引きこもったのだが、子供になつてみるとそうはいかないもので、その人たちのためにまた一軒京に家を持つ必要ができたのだが、こう

した静かな所にいて、にわかには京の町中の家へはいつて気も落ち着くものでないと思われるので、古い別荘のほうへでもやろうかと思う。そちらで今まで使っているだけの建物は君のほうへあげてもいいから、そのほかの所を修繕して、とにかく人が住めるだけの別荘にこしらえ上げてもらいたいと思うのだが」

と入道が言った。

「もう長い間持ち主がおいでにならない別荘になって、ひどく荒れたものですから、私たちは下屋しもやのほうに住んでおりますが、しかし今年の春ごろから内大臣さんが近くへ御堂みどうの普請をお始めになりました、あすこはもう人がたくさん来る所になっております

よ、たいした御堂ができるのですから、工事に使われている人数だけでもどんなに大きいかしれません。静かなお住居すまいがよろしいのならあすこはだめかもしれません」

「いや、それは構わないのだ。というのは内大臣家にも関係のあることでそこへ行こうとしているのだからね。家の中の設備などは追い追いかちからさせるが、まず急いで大体の修繕のほうをさせてくれ」

と入道が言う。

「私の所有ではありませんが、持っていらっしゃる方もなかったものですから、一軒家のような所を長く私が守って来たのです。



別荘についた田地なども荒れる一方でしたから、お亡<sup>な</sup>くなりになりました民部大輔<sup>みんぶだいゆう</sup>さんをお願いして、譲<sup>やう</sup>っていただくことにしましてそれだけの金は納めたのでした」

預かり人は自身の物のようにしている田地などを回収されないかと危うがって、権利を主張しておかねばというように、鬚<sup>ひげ</sup>むしやな醜い顔の鼻だけを赤くしながら顎<sup>あご</sup>を上げて弁じ立てる。

「私のほうでは田地などいらない。これまでどおりに君は思っておればいい。別荘その他の証券は私のほうにあるが、もう世捨て人になってしまつてからは、財産の権利も義務も忘れてしまつて、留守<sup>るすい</sup>居料も払つてあげなかったが、そのうち精算してあげる

よ」

こんな話も相手は、入道が源氏に関係のあることをにおわしたことで気味悪く思つて、私慾しよくをそれ以上たくましくはしかねていた。それから、入道家から金を多く受け取つて大井の山荘は修繕されていった。そんなことは源氏の想像しないことであつたから、上京をしたがらない理由は何にあるかと怪しんでは、姫君がそのまま田舎に育てられていくことによつて、のちの歴史にも不名誉な話が残るであらうと源氏は歎息たんそくされるのであつたが、大井の山荘ができ上がつてから、はじめて昔の母の祖父の山荘のあつたことを思い出して、そこを家にして上京するつもりである

と明石から知らせて来た。東の院へ迎えて住ませようとしたことに同意しなかったのは、そんな考えであつたのかと源氏は合点した。聡明<sup>そうめい</sup>なしかただとも思つたのであつた。惟光<sup>これみつ</sup>が源氏の隠し事に関係しないことはなくて、明石の上京の件についても源氏はこの人にまず打ち明けて、さつそく大井へ山莊を見にやり、源氏のほうで用意しておくことは皆させた。

「ながめのよい所でございまして、やはりまた海岸のような氣のされる所もございます」

と惟光は報告した。そうした山莊の風雅な女主人になる資格のある人であると源氏は思っていた。

源氏の作っている御堂は大覚寺の南にあたる所で、滝殿たきどのなどの美術的なことは大覚寺にも劣らない。明石の山荘は川に面した所で、大木の松の多い中へ素朴そぼくに寝殿の建てられているのも、山荘らしい寂しい趣が出ているように見えた。源氏は内部の設備までも自身のほうでさせておこうとしていた。親しい人たちをもまたひそかに明石へ迎えに立たせた。

免れがたい因縁に引かれていよいよそこを去る時になったのであると思うと、女の心は馴染なじみ深い明石の浦に名残なごりが惜しまれた。父の入道を一人ぼっちで残すことも苦痛であった。なぜ自分だけはこんな悲しみをしなければならぬのであろうと、朗らかな運

命を持つ人がうらやましかった。両親も源氏に迎えられて娘が出京するというようなことは長い間寝てもさめても願っていたことで、それが実現される喜びはあっても、その日を限りに娘たちと別れて孤独になる将来を考えると堪えがたく悲しくて、夜も昼も物思いに入道は呆<sup>ぼう</sup>としていた。言うことはいつも同じことで、

「そして私は姫君の顔を見ないでいるのだね」

そればかりである。夫人の心も非常に悲しかった。これまでもすでに同じ家には住まず別居の形になっていたのであるから、明石が上京したあとに自分だけが残る必要も認めてはいないものの、地方にいる間だけの仮の夫婦の中でも月日が重なって馴染<sup>なじみ</sup>の

深くなつた人たちは別れがたいものに違いないのであるから、まして夫人にとっては頑固がんこな我意おつとの強い良人ではあつたが、明石に作つた家で終わる命を予想して、信賴して来た妻なのであるからにわかに別れて京へ行つてしまふことは心細かつた。光明を見失つた人になつて田舎いなかの生活をしていた若い女房などは、蘇生そせいのできたほどにうれしいのであるが、美しい明石の浦の風景に接する日のまたないであろうことを思うことで心のめいることもあつた。これは秋のことであつたからことに物事が身に沁しんで思われた。出立の日の夜明けに、涼しい秋風が吹いていて、虫の声もする時、明石の君は海のほうをながめていた。入道は後夜ごやに起きた

まままでいて、鼻をすすりながら仏前の勤めをしていた。門出の日は縁起を祝って、不吉なことはだれもいっさい避けようとしているが、父も娘も忍ぶことができずに泣いていた。小さい姫君は非常に美しく、夜光の珠たまと思われる麗質の備わっているのを、これまでどれほど入道が愛したかshれない。祖父の愛によく馴染んでいる姫君を入道は見て、

「僧形そうぎやうの私が姫君のそばにいることは遠慮すべきだとこれまでも思いながら、片時だってお顔を見ねばいられなかった私は、これから先どうするつもりだろう」

と泣く。

「行くさきをはるかに祈る別れ路にたへぬは老いの涙なりけり  
不謹慎だ私は」

と言って、落ちてくる涙を拭い隠そうとした。尼君が、京時代の左近中将の良人に、

「もろともに都は出できこのたびや一人野中の道に惑はん」

と言って泣くのも同情されることであつた。信頼をし合つて過ぎた年月を思うと、どうなるかわからぬ娘の愛人の心を頼みにし



て、見捨てた京へ帰ることが尼君をはかなくさせるのであった。  
明石が、

「いきてまた逢ひ見んことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼  
まん

送っただけでもくださいますか」

と父に頼んだが、それは事情が許さないことであると入道は言  
いながらも途中が気づかわれるふうが見えた。

「私は出世することなどを思い切ろうとしていたのだが、いよい

よその気になって地方官になったのは、ただあなたに物質的にだ  
けでも十分尽くしてやりたいということからだった。それから地  
方官の仕事も私に適したものでないことをいろんな形で教えられ  
たから、これをやめて地方官の落伍者らくごの一人で、京で輕蔑けいべつされる  
人間にこの上なつては親の名誉を恥ずかしめることだと悲しくて  
出家したがね、京を出たのが世の中を捨てる門出だったと、世間  
からも私は思われていて、よく潔くそれを実行したと私自身にも  
満足感があったが、あなたが一人前の少女になってきたのを見る  
と、どうしてこんな珠玉を泥土でいどに置くような残酷なことを自分は  
したかと私の心はまた暗くなってきた。それから仏と神を頼ん

で、この人までが私の不運に引かれて一地方人となってしまうようないやうにと願った。思いがけず源氏の君を婿に見る日が来たのであるが、われわれには身分のひけ目があつて、よいことにも悲しみが常に添つていた。しかし姫君がお生まれになつたことで私もだいぶ自信ができてきた。姫君はこんな土地でお育ちになつてはならない高い宿命を持つ方に違ひないのだから、お別れすることがどんなに悲しくても私はあきらめる。何事ももうとくにあきらめた私は僧じゃないか。姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時ざんじの間私に祖父と孫の愛を作つて見せてくださつたのだ。天に生まれる人も一度は三途さんずの川まで行くということに

あたることだとそれを思つて私はこれで長いお別れをする。私が死んだと聞いても仏事などはしてくる必要はない。死に別れた悲しみもしないでおおきなさい」

と入道は断言したのであるが、また、

「私は煙になる前の夕べまで姫君のことを六時の勤行ごんぎように混ぜて祈ることだろう。恩愛が捨てられないで」

と悲しそうに言うのであった。車の数の多くなることも人目を引くことであるし、二度に分けて立たせることも面倒めんどうなことであるといつて、迎えに来た人たちもまた非常に目だつことを恐れるふうであつたから、船を用いてそつと明石親子は立つことになつ

た。

午前八時に船が出た。昔の人も身にしむものに見た明石の浦の朝霧に船の隔たって行くのを見る入道の心は、仏弟子ぶつでしの超越した境地に引きもどされそうもなかった。ただ呆然ぼうぜんとしていた。

長い年月を経て都へ帰ろうとする尼君の心もまた悲しかった。

かの岸に心寄りにし海人船あまぶねのそむきし方に漕こぎ帰るかな

と言って尼君は泣いていた。明石は、

いかへり行きかふ秋を過ぎつつ浮き木に乗りてわれ帰る  
らん

と言っていた。追い風であつて、予定どおりに一行の人は京へはいることができた。車に移ってから人目を引かぬ用心をしながら大井の山莊へ行つたのである。

山莊は風流にできていて、大井川が明石でながめた海のように前を流れていたから、住居すまいの変わった気もそれほどしなかった。明石の生活がなお近い続きのように思われて、悲しくなることが多かった。増築した廊なども趣があつて園内に引いた水の流れも

美しかった。欠点もあるが住みついたならきつとよくなるであろうと明石の人々は思った。源氏は親しい家司けいしに命じて到着の日の一行の饗応きやうおうをさせたのであった。自身で訪ねたずて行くことは、機会を作ろう作ろうとしながらもおくれるばかりであった。源氏に近い京へ来ながら物思いばかりがされて、女は明石あかしの家も恋しかったし、つれづれでもあつて、源氏の形見の琴きんの絃いとを鳴らしてみた。非常に悲しい気のする日であつたから、人の来ぬ座敷で明石がそれを少し弾ひいていると、松風の音が荒々しく合奏をしかけてきた。横になっていた尼君が起き上がつて言った。

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

女<sup>むすめ</sup>が言<sup>い</sup>つた。

ふるさに見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰<sup>たれ</sup>か分<sup>わ</sup>くらん

こんなふうにはかながつて暮らしていた数日のちに、以前にもまして逢<sup>あ</sup>いがたい苦しさを切に感じる源氏は、人目もはばからずに大井へ出かけることにした。夫人にはまだ明石の上京したこ



とは言つてなかったから、ほかから耳にはいつては気まずいことになると思つて、源氏は女房を使いにして言わせた。

「桂<sup>かつら</sup>に私が行つて指図<sup>さしず</sup>をしてやらねばならないことがあるのですが、それをそのままにして長くなっています。それに京へ来たら訪ねようという約束のしてある人もその近くへ上つて来ているのですから、済まない気がしますから、そこへも行つてやります。

嵯峨<sup>さが</sup>野<sup>の</sup>の御堂<sup>みどう</sup>に何もそろっていない所にいらっしゃる仏様へも御挨拶<sup>あいさつ</sup>に寄りますから二、三日は帰らないでしょう」

夫人は桂の院という別荘の新築されつつあることを聞いたが、そこへ明石の人を迎えたのであつたかと気づくとうれしいことと

は思えなかった。

「斧おのの柄を新しくなさるなければ（仙人せんじんの碁を見物している間に、時がたって気がついてみるとその樵夫きこりの持っていた斧の柄は朽ちていたという話）ならないほどの時間はさぞ待ち遠いことでしょう」

不愉快そうなこんな夫人の返事が源氏に伝えられた。

「また意外なことをお言いになる。私はもうすっかり昔の私でなくなつたと世間でも言うではありませんか」

などと言わせて夫人の機嫌きげんを直させようとするうちに昼になつた。

微行<sup>しのび</sup>で、しかも前駆には親しい者だけを選んで源氏は大井へ来た。夕方前である。いつも狩衣姿<sup>かりぎぬ</sup>をしていた明石時代でさえも美しい源氏であつたのが、恋人に逢うがために引き繕<sup>のうし</sup>った直衣姿はまばゆいほどまたりっぱであつた。女のした長い愁<sup>うれ</sup>いもこれに慰められた。源氏は今さらのようにこの人に深い愛を覚えながら、二人の中に生まれた子供を見てまた感動した。今まで見ずにいたことさえも取り返されない損失のように思われる。左大臣家で生まれた子の美貌<sup>びぼう</sup>を世人はたたえるが、それは権勢に目がくらんだ批評である。これこそ真の美人になる要素の備わつた子供であると源氏は思った。無邪気な笑顔<sup>えがお</sup>の愛嬌<sup>あいきよう</sup>の多いのを源氏は非常にか

わいく思った。乳母めのとも明石へ立って行ったころの衰えた顔はなく  
なつて美しい女になっている。今日までのことをいろいろとなつ  
かしいふうに話すのを聞いていた源氏は、塩焼き小屋に近い田舎いなか  
の生活をしいてさせられてきたのに同情するというようなことを  
言つた。

「ここだつてまだずいぶんと遠すぎる。したがって私が始終は来  
られないことになるから、やはり私があなたのために用意した所  
へお移りなさい」

と源氏は明石に言うのであつたが、

「こんなふうには田舎者であることが少し直りましてから」

と女の言うのも道理であつた。源氏はいろいろに明石の心をいたわつたり、将来を堅く誓つたりしてその夜は明けた。なお修繕を加える必要のある所を、源氏はもとの預かり人や新たに任命した家職の者に命じていた。源氏が桂の院へ来るといふ報せしらせがあつたために、この近くの領地の人たちの集まつて来たのは皆そこから明石の家のほうへ来た。そうした人たちに庭の植え込みの草木を直させたりなどした。

「流れの中にあつた立石たていしが皆倒れて、ほかの石といつしよに紛れてしまつたらしいが、そんな物を復旧させたり、よく直させたりすればずいぶんおもしろくなる庭だと思われるが、しかしそれは

骨を折るだけかえってあとでいけないことになる。そこに永久い  
るものでもないから、いつか立って行ってしまう時に心が残つ  
て、どんなに私は苦しかったろう、帰る時に」

源氏はまた昔を言い出して、泣きもし、笑いもして語るので  
あつた。こうした打ち解けた様子に見える時に源氏はいつそう美  
しいのであつた。のぞいて見ていた尼君は老いも忘れ、物思いも  
跡かたなくなってしまう気がして微笑ほほえんでいた。東の渡殿わたどのの下を  
くぐって来る流れの筋を仕変えたりする指図さしずに、源氏は袿つちぎを引き  
掛けたくつろぎ姿でいるのがまた尼君にはうれしいのであつた。  
仏の閼伽あかの具などが縁に置かれてあるのを見て、源氏はその中が

尼君の部屋であることに気がついた。

「尼君はこちらにおいでになりますか。だらしない姿をしています」

と言って、源氏は直衣のうしを取り寄せて着かえた。几帳きちょうの前にすわって、

「子供がよい子に育ちましたのは、あなたの祈りを仏様がいれてくださったせいだろうとありがとうございます。俗をお離れになった清い御生活から、私たちのためにまた世の中へ帰って来てくださったことを感謝しています。明石ではまた一人でお残りになつて、どんなにこちらのことを想像して心配していただくさるだろ

うと済まなく私は思っています」

となつかしいふうに話した。

「一度捨てました世の中へ帰ってまいって苦しんでおります心も、お察しくださいましたので、命の長さもうれしく存ぜられます」

尼君は泣きながらまた、

「荒磯<sup>あらいそ</sup>かげに心苦しく存じました二葉<sup>ふたば</sup>の松もいよいよ頼<sup>たの</sup>もしい未来が思われます日に到達いたしました<sup>が</sup>、御生母<sup>おせいぼ</sup>がわれわれ風情<sup>ふうせい</sup>の娘でございますことが、御幸福の障<sup>さわ</sup>りにならぬかと苦勞<sup>くろう</sup>にしております」



などという様子に品のよさの見える婦人であつたから、源氏はこの山莊の昔の主あるじの親王のことなどを話題にして語つた。直された流れの水はこの話に言葉を入れたいように、前よりも高い音を立てていた。

住み馴なれし人はかへりてたどれども清水しみづぞ宿の主人あるじがほなる

歌であるともなくこう言う様子に、源氏は風雅を解する老女であると思つた。

「いさらぬはやくのことも忘れじをもとの主人あるじや面変おもはりせる

悲しいものですね」

と歎息たんそくして立つて行く源氏の美しいとりなしにも尼君は打たれて茫ぼうとなっていた。

源氏は御堂みどうへ行つて毎月十四、五日と三十日に行なう普賢講ふげんこう、阿弥陀あみだ、釈迦しゃかの念仏さんまいのほかにも日を決めてする法会ほうえのことを僧たちに命じたりした。堂の装飾や仏具の製作などのことも御堂の人々へ指図さしずしてから、月明の路みちを川沿いの山荘へ帰つて来

た。

明石の別離の夜のこと源氏の胸によみがえって感傷的な気分になっている時に女はその夜の形見の琴を差し出した。弾ひきたい欲求もあつて源氏は琴を弾き始めた。まだ絃いとの音ねが変わつていなかった。その夜が今であるようにも思われる。

契りしに変はらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや  
と言うと、女が、

変はらじと契りしことを頼みにて松の響に音を添<sup>ね</sup>へしかな

と言う。こんなことが不つりあいに見えないのは女からいえば過分なことであつた。明石時代よりも女の美に光彩が加わつてゐた。源氏は永久に離れがたい人になつたと明石を思っている。姫君の顔からもまた目は離せなかつた。日蔭<sup>ひかげ</sup>の子として成長してゐるのが、堪えられないほど源氏はかわいそうで、これを二条の院へ引き取つてできる限りにかしずいてやることにすれば、成長後の肩身の狭さも救われることになるであらうとは源氏の心に思われることであつたが、また引き放される明石の心が哀れに思われ

て口へそのことは出ずにただ涙ぐんで姫君の顔を見ていた。子心にはじめは少し恥ずかしがっていたが、今はもうよく馴<sup>な</sup>れてきて、ものを言つて、笑つたりもしてみせた。甘えて近づいて来る顔がまたいっそう美しくてかわいいのである。源氏に抱かれてゐる姫君はすでに類のない幸運に恵まれた人と見えた。

三日目は京へ帰ることになっていたので、源氏は朝もおそく起きて、ここから直接帰って行くつもりでいたが、桂の院のほうへ高官がたくさん集まつて来ていて、この山荘へも殿上役人がおおぜいで迎えに来た。源氏は装束をして、

「きまりの悪いことになったものだね、あなたがたに見られてよ

い家<sup>うち</sup>でもないのに」

と言いながらいつしよに出ようとしたが、心苦しく女を思つて、さりげなく紛らして立ち止まった戸口へ、乳母<sup>めのと</sup>は姫君を抱いて出て来た。源氏はかわいい様子で子供の頭を撫<sup>な</sup>でながら、

「見ないでいることは堪えられない気のするのにもにわかな愛情すぎるね。どうすればいいだろう、遠いじゃないか、ここは」

と源氏が言うと、

「遠い田舎の幾年よりも、こちらへ参ってたまさかしかお迎えできないようなことになりましたは、だれも皆苦しゅうございましょう」

など乳母は言った。姫君が手を前へ伸ばして、立っている源氏のほうへ行こうとするのを見て、源氏は膝ひざをかがめてしまった。

「もの思いから解放される日のない私なのだね、しばらくでも別れているのは苦しい。奥さんはどこにいるの、なぜここへ来て別れを惜しんでくれないのだろう、せめて人心地ひとごころが出てくるかもしれないのに」

と言うと、乳母は笑いながら明石の所へ行つてそのとおりを言った。女は逢あった喜びが二日で尽きて、別れの時の来た悲しみに心を乱していて、呼ばれてもすぐに出ようとしないうのを源氏は心のうちであまりにも貴女きじよぶるのではないかと思っていた。女房

たちからも勧められて、明石<sup>あかし</sup>はやつと膝行<sup>いざ</sup>つて出て、そして姿は見せないように几帳<sup>きちよう</sup>の蔭<sup>かげ</sup>へはいるようにしている様子に氣品が見えて、しかも柔らかい美しさのあるこの人は内親王と言つてもよいほどに氣高<sup>けだか</sup>く見えるのである。源氏は几帳<sup>きちよう</sup>の垂<sup>た</sup>れ絹を横へ引いてまたこまやかにささやいた。いよいよ出かける時に源氏が一度振り返つて見ると、冷靜にしていた明石も、この時は顔を出して見送つていた。源氏の美は今が盛りであると思われた。以前は瘦<sup>や</sup>せて背丈<sup>せたいけ</sup>が高いように見えだが、今はちようどいいほどになつていた。これでこそ貫目のある好男子になられたというものであると女たちがながめていて、指貫<sup>さしぬき</sup>の裾<sup>すそ</sup>からも愛嬌<sup>あいぎやう</sup>はこぼれ出るよう



に思った。解官されて源氏について漂泊さすらえた蔵人くろうどもまた旧もとの地位に復かえつて、鞍負尉ゆぎえのじょうになった上に今年は五位も得ていたが、この好青年官人が源氏の太刀たちを取りに戸口へ来た時に、御簾みすの中に明石のいるのを察して挨拶あいさつをした。

「以前の御厚情を忘れておりませんが、失礼かと存じますし、浦風に似た気のいたしました今暁の山風にも、御挨拶を取り次いでいただく便びんもございませんでしたから」

「山に取り巻かれておりましては、海べの頼りない住居すまいと変わリもなく、松も昔の（友ならなくに）と思って寂しがっておりますましたが、昔の方がお供の中においでになって力強く思います」

などと明石は言った。すばらしいものにこの人はなつたものだ、自分だって恋人にしたいと思つたこともある女ではないかな  
どと思つて、驚異を覚えながらも蔵人くらうどは、

「また別の機会に」

と言つて男らしく肩を振つて行つた。りっぱな風采ふうさいの源氏が静かに歩を運ぶかたわらで先払いの声が高く立てられた。源氏は車  
へ頭中將とうのちゆうじょう、兵衛督ひようづゑのかみなどを陪乗させた。

「つまらない隠れ家を発見されたことはどうも残念だ」

源氏は車中でしきりにこう言つていた。

「昨夜はよい月でございましたから、嵯峨さがのお供のできませんで

したことが口惜くちおしくてなりません、今朝けさは霧の濃い中をやって参ったのでございます。嵐山あらしやまの紅葉もみじはまだ早うございました。今は秋草の盛りでございますね。某朝臣ぼうあそんはあすここで小鷹狩こたかがりを始めてただ今いっしょに参れませんでした、どういたしますか」

などと若い人は言った。

「今日はもう一日桂かつらの院で遊ぶことにしよう」

と源氏は言つて、車をそのほうへやった。桂の別荘のほうではにわかきよかつに客の饗応しやくの仕度が始められて、鵜飼ういなども呼ばれたのであるがその人夫たちの高いわからぬ会話が聞こえてくるごとに海岸にいたころの漁夫の声が思い出される源氏であつた。大井の

野に残った殿上役人が、しるしだけの小鳥を萩はぎの枝などへつけてあとを追って来た。杯がたびたび巡ったあとで川べの逍遙しょうようを危あやぶまれながら源氏は桂の院で遊び暮らした。月がはなやかに上ってきたころから音楽の合奏が始まった。絃樂のほうは琵琶びわ、和琴わごんなどだけで笛じょうずの上手が皆選ばれて伴奏をした曲は秋にしっくり合ったもので、感じのよいこの小合奏に川風が吹き混じっておもしろかった。月が高く上ったころ、清澄な世界がここに現出したような今夜の桂の院へ、殿上人がまた四、五人連れで来た。殿上に伺候していたのであるが、音楽の遊びがあつて、帝みかどが、

「今日は六日の謹慎日おとどが済んだ日であるから、きっと源氏の大

は来るはずであるのだ、どうしたか」

と仰せられた時に、嵯峨へ行っていることが奏されて、それで下された一人のお使いと同行者なのである。

「月のすむ川の遠<sup>をち</sup>なる里なれば桂の影はのどけかるらん

うらやましいことだ」

これが蔵人<sup>くらひどの</sup>弁であるお使いが源氏に伝えたお言葉である。源氏はかきこまっ<sup>くま</sup>て承った。清涼殿での音楽よりも、場所のおもしろさの多く加わったここの管絃楽に新来の人々は興味を覚えた。ま

た杯が多く巡った。ここには纏頭てんとうにする物が備えてなかったために、源氏は大井の山荘のほうへ、

「たいそうでない纏頭の品があれば」

と言ってやった。明石あかしは手もとにあった品を取りそろえて持たせて来た。衣服箱二荷であつた。お使いの弁は早く帰るので、さっそく女装束が纏頭に出された。

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山ざと

というのが源氏の勅答の歌であつた。帝の行幸を待ち奉る意が

あるのであろう。「中に生おひたる」（久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる）と源氏は古歌を口ずさんだ。源氏がまた躬恒みつねが「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵こよひはところからかも」と不思議がった歌のことを言い出すと、源氏の以前のことを思つて泣く人も出てきた。皆酔つてもいるからである。

めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し  
月

これは源氏の作である。

浮き雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるベ  
き

頭中とうのちゆうじゆう将である。右大弁は老人であつて、故院の御代みよにも睦まじ  
くお召し使いになつた人であるが、その人の作、

雲の上の住みかを捨てて夜半よはの月いづれの谷に影隠しけん

なおいろいろな人の作もあつたが省略する。歌が出てからは、  
人々は感情のあふれてくるままに、こうした人間の愛し合う世界



を千年も続けて見ていきたい気を起こしたが、二条の院を出て四日目の朝になった源氏は、今日はぜひ帰らねばならぬと急いだ。一行にいろいろな物をかついだ供の人が加わった列は、霧の間を行くのが秋草の園のようで美しかった。近衛府このえふの有名な芸人とねの舎人りで、よく何かの時には源氏について来る男に今朝も「その駒こま」などを歌わせたが、源氏をはじめ高官などの脱いで与える衣服の数が多くてそこにもまた秋の野の錦にしきの翻る趣があつた。大騒ぎにはしゃぎにはしゃいで桂の院を人々の引き上げて行く物音を大井の山荘でははるかに聞いて寂しく思った。言ことづてもせずに帰って行くことを源氏は心苦しく思った。

二条の院に着いた源氏はしばらく休息をしながら夫人に嵯峨<sup>さが</sup>の話をした。

「あなたと約束した日が過ぎたから私は苦しみましたよ。風流男どもがあとを追って来てね、あまり留めるものだからそれに引かれていたですよ。疲れてしまった」

と言って源氏は寢室へはいった。夫人が気むずかしいふうになっているのも気づかないように源氏は扱っていた。

「比較にならない人を競争者でもあるように考えたりなどすることもあることですよ。あなたは自分では自分であると思いがあっていいのですよ」

と源氏は教えていた。日暮れ前に参内しようとして出かけぎわに、源氏は隠すように紙を持って手紙を書いているのは大井へやるものらしかった。こまごまと書かれている様子がうかがわれるのであった。侍を呼んで小声でささやきながら手紙を渡す源氏を女房たちは憎く思った。その晩は御所で宿直とのいもするはずであるが、夫人の機嫌きげんの直っていなかったことを思って、夜はふけていたが源氏は夫人をなだめるつもりで帰って来ると、大井の返事を使いが持って来た。隠すこともできずに源氏は夫人のそばでそれを読んだ。夫人を不愉快にするようなことも書いてなかったの  
で、

「これを破ってあなたの手で捨ててください。困るからね、こんな物が散らばっていたりすることはもう私に似合ったことではないのだからね」

と夫人のほうへそれを出した源氏は、きようそく脇息によりかかりながら、心のうちでは大井の姫君が恋しくて、ひ灯をながめて、ものも言わずにじっとしていた。手紙はひろがったままであるが、によおう女王が見ようともしないのを見て、

「見ないようにして、目のどこかであなたは見ているじゃないですか」

と笑いながら夫人に言いかけた源氏の顔にはこぼれるような愛あいぎ

嬌<sup>よう</sup>があつた。夫人のそばへ寄つて、

「ほんとうはね、かわいい子を見て来たのですよ。そんな人を見るとやはり前生の縁の浅くないということが思われたのですがね、とにかく子供のことはどうすればいいのだろう。公然私の子供として扱うことも世間へ恥ずかしいことだし、私はそれで煩悶<sup>はんもん</sup>しています。いっしょにあなたも心配してください。どうしよう、あなたが育ててみませんか、三つになつています。無邪気なかわいい顔をしているものだから、どうも捨てておけない気がします。小さいうちにあなたの子にしてもらえば、子供の将来を明るくしてやれるように思うのだが、失敬だと思ひにならな

ければあなたの手で袴着<sup>はかまぎ</sup>をさせてやってください」

と源氏は言うのであった。

「私を意地悪な者のようにばかり決めておいでになって、これから私には大事なことを皆隠していらっしゃるものですもの、私だけがあなたを信頼していることも改めなければならぬところごろは私思っています。けれども私は小さい姫君のお相手にはなれますよ。どんなにおかわいいでしよう、その方ね」

と言って、女王は少し微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。夫人は非常に子供好きであつたから、その子を自分がもらって、その子を自分が抱いて、大事に育ててみたいと思った。どうしよう、そうは言つたもののここ

へつれて来たものであろうかと源氏はまた煩悶はんもんした。

源氏が大井の山莊を訪うことは困難であつた。嵯峨さがの御堂みどうの念  
仏の日を待つてはじめて出かけられるのであつたから、月に二度  
より逢あいに行く日はないわけである。七夕たなばたよりは短い期間であつ  
ても女にとってには苦しい十五日が繰り返されていった。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---